

しまね読進協 第42号

発行日 平成27年2月12日

発行所 島根県図書館協会読書推進運動協議会部会 (松江市内中原町52番地 島根県立図書館内)

平成二十六年

島根県図書館協会の主な事業

◎市町村読書普及研修会

「POPは楽しい」

講師 片山茂氏 (片山POP工房)

浜田会場 十月二十日

松江会場 十月二十一日

◎特別研修

「トークセッション」

未来の図書館を、はじめませんか? & 図書館をまちなまんなかに考える」

講師 岡本真氏 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社)

下田富美子氏 (長崎市立図書館)

二月十一日

◎公益社団法人・読書推進運動協議会より表彰

野間読書推進賞

・おはなしブリュッケン (松江市)

・全国優良読書グループ

・島根県立図書館成人読書会Eグループ (松江市)

◎島根県図書館協会より

読書推進運動功労者の表彰 (個人・団体)

・高田頼昌 (益田市)

・益田市立図書館おはなし会ボランティア

もこもここの会 (益田市)

・波積絵本の読み聞かせの会 (江津市)

・お話ハウム (松江市)

◎読書体験記の募集

応募数 七編

入賞 三編

◎「この本いいよ!」島根の高校生・高専生

おすすめの一冊」投稿の募集

応募団体 七学校

応募数 九十六点

◎機関誌等の発行・配布

・「しまね読進協」第四十二号

読書普及研修会で

POPを作成しました!

十月二十日・二十一日に市町村読書普及研修会を開催しました。公共図書館や学校図書館の職員、書店員など、計一〇七名が参加しました。今回のテーマは「POPは楽しい」。本の魅力を伝える役割を持つPOPですが、いざ作るとなると難しく思えるものです。今回は、日本出版販売での勤務経験のある片山茂氏を講師にお迎えし、読書意欲を刺激するPOPの作り方を教わりました。

前半の講義では、POPの基本要素と作成のポイントについてお話いただきました。POPは「伝わりやすい表現」「美しい外観」「相手に伝えようとする心」といった要素を含むため、POPの作成は表現力の向上に役立ち、作り手のモラルや陳列意欲の向上にもつながるとのことです。

実際の作成方法については、読みやすい文字の書き方やレイアウト、絵が苦手な人でも図形や線を描き足すだけでぐっと魅力的なPOPにする方法を教わりました。また、丸いシールに顔を描いて貼ったり、インクを含ませたティッシュを貼って水墨画のような質感を表現したりするなど、ユニークな技術を伝授していただきました。

講義後は、各自持ち寄った本を紹介するPOPを作成しました。今回の研修では、短時間で作成する練習のため、紙を切るときも絵を描く

ときも下書きせずに挑みます。ちょっと緊張しながらも、色とりどりのペンやマスキングテープ、シールやクラフトパンチなどを駆使して、全員が自分だけのPOPを完成させました。参加者からは「POPの作成は難しいと思っていたが、とても楽しかった」「いつの間にか熱中していた」「学校で子どもたちにも作らせたい」などの感想が寄せられ、実り多い研修となりました。

研修で得た知識と技術を活かし、今後も本と人をつないでいきたいと思えます。



楽しくPOPを作成中

読書体験記 入賞作品

〈一般の部〉

「志賀直哉著『城の崎にて』を読んだ」

猿木浩二（出雲市）



『城の崎にて・小僧の神様』
志賀直哉著、角川書店

作者は電車に跳ね飛ばされてケガをし、その後養生に一人で但馬の城崎温泉に出かけ、そこで出会った蜂、鼠、イモリという小動物の生死の際を凝視することにより、人間の、そして自分の生死を見つめた。

この作品を読み、私もそんな小動物の生死を見つめた時の記憶が甦った。

私はある雨の休日、好きな神社巡りをするため近くの神社を訪れた。いつもの通り社殿を眺めていたら、ふと縁の下に「蟻地獄」が目にとまった。小学生の時以来、数十年ぶりの「対面」だ。往時は雨宿りした家の軒下で見つけたが、人でも呑み込むような恐ろしいイメージに比べ、地獄の小ささに驚いた記憶がある。ただ神社の地獄もやはり貧弱だった。私は三センチ程の小さな地獄を仕掛け、いつ掛かるともしれない獲物をひたすら待つ姿に哀れを感じたのが、一匹の蟻を捕まえて地獄に落とした。蟻は簡単に上がれそうな斜面をなかなか登れない。そのうち地獄の底に転げ落ちた。すると地獄の主が蟻を捕まえたように、蟻はどろどろの中沈んでいく。私は自分が落としておきなな

ら蟻が可哀想になり木切れで蟻地獄を掘り出した。蟻は命からがら逃げて行った。しかし、全く動かない丸い胴体の不恰好な姿を見ていたら、今度は蟻地獄が可哀想になり、壊れた巣に戻し、半泣きで家に帰った思い出がある。

蟻地獄は夢に出てきそうな、怖く、不気味なイメージだが「その時」をじっと待つしかない。哀れな生き物でもある。しかし、そんな哀れっぽい蟻地獄も懸命に生きている。勿論、蟻も同じく、日中の暑い中、ひたすら食料を探して歩き、懸命に生きているのである。ただ、それは生きようという「意志」ではなく、生あるものの本能であろう。言い方を変えれば、生きてし生けるものは人間のみならず、小動物から昆虫、はたまた細菌類まで死に至らない方に必死で舵を切る。それが、生ある物の根源なのだから…。

作者は死に至った蜂、鼠、イモリに対し、自分が生きている事の意味を考える。「自分は生きている事に対し、感謝しなければ済まぬような気もした。しかし実際、喜びの感じは湧き上がってはこなかった。生きている事と死んでしまっている事と、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした」と記述する。

作者が言う、生きている事に対しての感謝は当然だろう。しかし「生きている喜びは湧き上がらず、生死に差はないような気がした」という言葉は難しく、意味深い。現実には生きている事と死ぬ事は全く違う。人間、まず生きていることが一番なのだから。ただ、それは何のためなどと、生きる意味を問われればちと困るのだが…。私はこの作品を読んで「生きる」意味について再考させられた。そして…。生きている事、生かされている事に感謝し、生きている一日一日を大切に生きようと誓った。

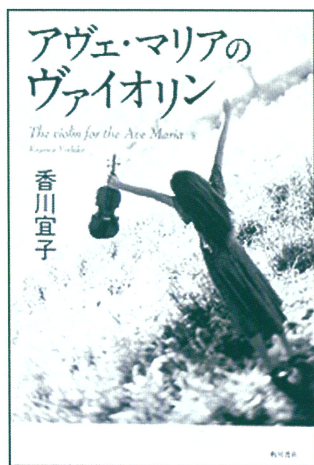
「城の崎にて」 志賀直哉著 角川書店



〈児童・生徒の部〉

「受け継ぐ未来」

柴田琴音（矢上高校）



『アヴェ・マリアのヴァイオリン』
香川宜子著、KADOKAWA

朝、起きて家族がいる。温かいご飯が三食食べられて、学校で知らなかった事を学ぶことが出来る。この安心でできる生活がずっと続く、私はそう思っていた。

一九三三年の冬、ナチス党のヒトラーが首相に選ばれたことからユダヤ人の迫害が始まった。あすかのヴァイオリンの元の持ち主ハンナも被害に遭った一人だ。ハンナはこの迫害で家族全員を失った。ハンナ自身も生き延びる為に演奏するといふ与えられた任務があった。「生き延びる為に」今の私には衝撃的すぎる時代の運命だった。ハンナが生きた時代より豊かで明日の命の心配をしなくて良い今の時代。この安心して生活が送れる時代は、悲しみを味わった人達が残してくれた時代だと改めて思い、感謝の気持ちでいっぱいになった。

私は現在、高校一年生で将来は看護師になりたいと思っている。夢を現実にするための行動をとらなければならぬ時期だ。その為に今、日々勉強させてもらっている。高校生になってから私は課題をこなしていくことに精一杯になり、自分が見えないことがよくある。課題も内容を理解することよりも終わらせることが目標となっていた。そしてテストの前には焦りがつのってしまふ。笑顔を作り出すために目の前のことを心を込めてするということが出来な

くなっていた。そうすることで楽しみが増え、励みとなって課題に取り組める、この事も高校生活の忙しさや焦りに追われ忘れていた。ハンナと出会い自分の夢が持てることやその夢のために努力できる環境を作ってもらえていることなど私の生活の全てが当たり前でなく、たくさんの人のお陰で一日が送れていることを再確認できた。ハンナの生きた時代と運命を知り、感謝と共に自分の振り返りが見えてきた。

将来「働く」ということは「生きる」「つなぐ」と同じになる。もう少し本気で物事に取り組み努力が必要だと思った。看護師になりたいとただ漠然と考えているだけでは何も始まらない。学ぶ事が出来ることへの感謝の気持ちを忘れず高校生活を送り、自分の夢を叶えてゆく力を付けていきたい。

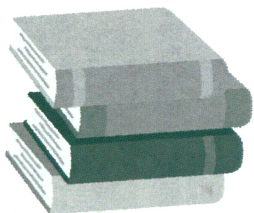
私はハンナの人生から、今ある生活が当たり前でないことを教えてもらった。私の周りの人達、みんなに支えられて生きているということを知った。私が一番忘れかけていた事は、その全てに感謝することだったのだと思う。高校生活の中でこれからも悩みは出てくると思うし、自分を見失う時もあると思うけれど、この気持ちだけは忘れずしたい。

ハンナに出会えてっ少しだけ「私」が見えてきた。目の前の事一つ一つに心を込め、感謝の気持ちを持って生活していくことと思う。

近い将来、私は家族、友達、先生、出会う全ての人達に安心を届けられる看護師に必ずなる。

『アヴェ・マリアのヴァイオリン』

香川宜子著 KADOKAWA



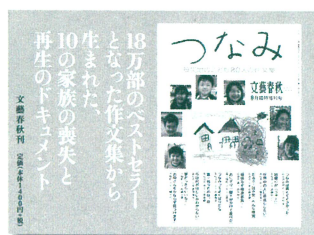
「私が見たこと」

佐々木 祐寛理 (矢上高校)

「つなみ」の子どもたち

作文に書かれた物語

森 健



『「つなみ」の子どもたち』
森健著、文藝春秋

最近ニュースで震災の話がない。当時、本当に衝撃だったマグニチュード九の地震も、すべてを奪った津波も、三年たった今ではほとんど忘れてしまっていた。いや、そもそも東北とほぼ反対側に住む私にとって、衝撃は受けても、やはり遠い土地で起こったような実感のなさがあった。東北に住む親戚に亡くなった人がいなかったこともあると思う。当事者でない私にとって、東北大震災はそんなものだった。

テレビで見なくなったとき、現地では復興が進んできて元の生活が出来るようになったのか、と漠然と思っていた。しかし、母から大川小学校の事件について聞いたとき、まだまだ解決していないことを知った。そんなときにかかった、南三陸のボランティア活動の募集は、私にとってチャンスだった。

五日間、車内泊を除けば三日間、私は宮城に行きボランティア活動を行った。現地の方の話を聞き、町だった場所も見た。本当にここが町だったのかと疑いたくなるほど、何もなかった。あたりで響く音は、土を均す重機の音で、新たな街を作り直すために作業が進められていた。三年半後の東北はやっとこの状態。本当にまだまだということを実感した。しかし今回のボランティアで見たものは、そんな悲しいモノばかりではなかった。

子どもたちが書いた作文『つなみ』を私は読んだことが

ある。その続編である『つなみ』の子どもたち』では、そんな子どもたちの経緯とその後が載っている。その中に多くの家族が出てくるのだが、やはりその中で子どもたちの役割はとても大きい。小さくても健気に頑張る姿は残された周りの大人を勇気づける糧になっているようだった。家族を大切な誰かを、大切な何かを。あの震災は多くの人たちの大切なモノを奪っていった。仕事も故郷も当たり前ものが、一日で消えてしまったなら、どれほどの絶望がそこに存在するだろう。しかし、そんな中でも娘や息子を、あるいは経験を、残ったものを支えに少しでも確実に前に進んでいた。実際活動の中でも、そうして前に進んでおられる人をたくさん見た。漁師の方は意見の違いがあるものの、たくさんのお土が集まって漁業を復活させようとしておられた。私たちに震災について話をしてくれた方は、家族を失いながらも伝えようと、いろいろなところで講演に行っておられた。それが私にとってはとても凄いとこのように思えた。

東北の復興は本当にまだまだで、悲しみは消えないのだと思う。それでも、前に進む人がいることを、私は知った。そして、それを私達が忘れてはいけないのだと思った。この夏は、確実に私を変えたと思う。うまくは言えないけれど、知ったことは、大きな変化だと思うから。

「伝えることも支援になります。どうか伝えてください。そして忘れないでください。」私は、私が今できる支援をしていきたい。

『「つなみ」の子どもたち』 森健著 文藝春秋



平成二十六年年度 読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人・読書推進運動協議会から、「島根県立図書館成人読書会Eグループ」が全国優良読書グループとして表彰されました。

◆島根県立図書館成人読書会Eグループ(松江市)

代表者 中村 久美子

昭和五十一年四月の発足以来、三十八年にわたり、島根県立図書館定期講座「成人読書会」(毎月第二・四曜日)に参加しています。会員数は、現在5名です。読書会で読んだ本は、ノートに感想やまとめが記録されており、記録が残っているものだけでも三百冊以上、発足からの累計では四百冊を優に超えています。

継続のコツは、良いリーダーがいることやお互い気心が知れ、何でも話し合える雰囲気であること、自分が読んで面白かった本の紹介をすることです。読書会後のカフェでの歓談、年一回程度の会食など、仲間が共に語り合いながら、永く読書会が続いています。

島根県図書館協会読書推進運動協議会部会では、読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な団体及び個人を毎年表彰しています。今年も個人一名、三団体を表彰しました。

〔個人〕

◆高田 頼昌(益田市)

高田氏は、子どもたちの図書館離れが進むなか、図書館長の経験を活かし、夏休みに小学生を対象とした「作文講座」を平成十五年から現

在まで市立図書館で開催し、その講師を務めています。この講座を通して、子どもたちの本に対する関心をいろいろな角度から導き、本を読む意図やその感想を書くことの大切さを多くの子どもたちに伝えていきます。

〔団体〕

◆益田市立図書館おはなし会ボランティア

もこもここの会(益田市)

代表者 釜野 康代

平成五年に発足し、現在の会員数は十八名です。市立図書館での「おはなし会」を中心に年間六十回の読み聞かせを行っています。また、乳児健診においても、平成十四年から乳幼児の親子を対象に読み聞かせを実施しており、乳幼児期から絵本と関わるきっかけなどを伝えていきます。さらに地域の施設等にも出向き読書の普及・推進活動を展開しています。

◆波積絵本の読み聞かせの会(江津市)

代表者 井田 晴子

平成八年に発足し、現在の会員数は七名です。地元のお寺で月一回開催されていた子ども会での読み聞かせから活動が始まりました。その後、学校の週休二日制を機に、公民館での活動へと移行しました。現在は、月一回の保育所での読み聞かせ活動をベースに、地元での集いや市主催の「こどもまつり」等で子どもたちと共作の大型紙芝居やペープサート、朗読劇等の上演を行っています。子どもたちに絵本の楽しさや物語の世界の素晴らしさを伝える活動を続けています。

◆お話baum(松江市)

代表者 小谷 典子

平成十五年に市立図書館で開催された「語り

手養成講座」を受講した第一期生により平成十六年に発足しました。現在の会員数は十七名です。市立図書館や市内の幼稚園、小学校等で子どもたちにお話(ストーリーテリング)を聞く機会を提供するとともに、想像力を養い、やわらかな心や考える力を育み、情操豊かな子どもたちを育成する事業に携わっています。

この本いいよ! 島根の高校生・高専生 おすすめの1冊

島根県図書館協会では、今年も県内の高校生、高専生の皆さんから「おすすめの本」の投稿を募集しました。

今年は96点の投稿があり、そのうち15点を本とともに、県立図書館で展示しました(10月28日~11月30日)。

投稿作品より



『ピーティ』
パン・マイケルセン作
鈴木出版(3年女子)

編集後記

松江市の読書ボランティア「おはなしブリュッケン」が第44回「野間読書推進賞」(公益社団法人読書推進運動協議会)を受賞されました。県内各地で、ストーリーテリングの指導や普及を行い、子どもたちの心に喜びと希望の種をまいてこられた活動が認められたものです。島根県では、これまで個人3名の方が受賞されており、21年ぶり、団体では初めての受賞となりました。心からお祝い申し上げます。
(編集員一同)